

東北大学大学院

# 国際文化研究科

# 広報

GSICS

PUBLIC  
INFORMATION  
MAGAZINE No.23

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp>



GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL  
CULTURAL STUDIES, TOHOKU UNIVERSITY

国際文化研究科 広報

No. **23**

October 2010



## CONTENTS

### 02 研究科長へのインタビュー

小林 文生 研究科長

### 03 言語脳認知総合科学 研究センターの紹介

### 04 博士課程修了者からの メッセージ

吉岡 宏祐  
蔡 嘉綾  
カンキブン  
柴田 尚子

### 06 研究紹介

大東 一郎 准教授  
劉 庭秀 准教授

### 07 最近の著作から

### 08 INFORMATION

国際文化基礎講座(公開講座)  
東北大学国際文化学会大会  
東北大学国際文化学会第6回講演会  
オープンキャンパス

研究科入試情報



TOHOKU  
UNIVERSITY

## 研究科長へのインタビュー



毎号、『広報』では研究科長からのメッセージを掲載していますが、今回は研究科博士後期課程の学生である近藤百世さん（イスラム圏研究）にインタビューになっていただき、小林文生研究科長に研究科に関して様々な質問をしていただきました。

国際文化研究科とはどういう研究科なのでしょう。

この研究科は1993年に設立されました。研究科創設時の書類には、「文化の国際化」という現状をふまえて、「国際文化研究」とは「各地域の形成・発展・交流についての過去、現在、将来を、現代における国際的一体化の視点から、総合的・学際的に考察する学問である」と、そのように定義されています。違う角度から言うと、今までの人文・社会の既成分野では捉えきれない部分を視野に入れ、枠組みを越えた新しい学問の思考方法を開拓したい、というのが国際文化研究科の理念ということになります。「国際文化研究」とは「～だ」という具合に確立したものと言えるものではなく、「～というものを作って行きたい」というスタンスのものなのです。つまり、新たな知の創造を目指しているということです。ちなみに、既に1992年に神戸大学で国際文化学部が開設されていましたが、独立大学院としては日本で初めて「国際文化」を名乗ったのが当研究科です。それ以後、このような研究科が日本各地に出来ました。

当研究科の「大学院大学」としての特色、メリットはどこにありますか。

学部を持っていないということは、様々な大学の、様々な学部出身者がいるということです。異なる学部出身者が一緒に学ぶことで、過去の枠にとらわれない自由な議論が出来るというのがメリットです。ただし、これはデメリットになる恐れもあります。つまり、基礎的な部分でどこまで共有できるところがあるか、という点に注意が必要です。共通理解がないまま理念ばかりが先走って議論していると、間違ふ恐れがあります。それを良い方向に持っていけるかどうかが課題なのです。その為にお互いが自覚して努力をしなければならないでしょう。



そのような研究をしていくために、外国語の力はどのぐらい必要でしょうか。

これはとても大事なことです。最低限、英語＋2つの言語が出来ることが望ましいと考えています。この2つの言語の中には母語を含みます。また、英語は現状として世界の共通語なので、どうしても必要でしょう。同時に、英語以外の外国語に一定以上の高いレベルで習熟していることは、「相対化する視点を持つ」という意味でとても大切なことであり、不可欠とさえ言えます。

英語と母語以外の言語はどのように学ばいいのでしょうか。

身近なところでは東北大学の全学教育の場があるので、そこで学んでほしいと思います。東北大学は様々な言語が学べる態勢が出来ています。また、大学院に入ってから新たな言語を学ぶことも意欲次第では可能です。

研究科内の学生同士の交流や、他研究科との交流について何かお考えはありますか。

特に組織立てては考えてはいません。ただ、違う講座に属する学生同士が同じ関心から読書会を始めるといったことは以前からありました。基本的には、そうしたものは自主的に行われるべきものと考えています。何かご希望はありますか。



講座を越えた合同授業、学会でのシンポジウムや研究会などはどうなのでしょう。

それは学生の方から主体的にやるべきものだと思います。教師の方は助言者として色々とするのももちろんあると思います。また、学生が他の講座の授業に関心を持っていただきたいと思っているのですが、現状はそうではありませんね。でも、研究科が出来た頃はそうではなく、日常的に講座の壁を越えるということがありました。何か自然に「みんなで作って行こう」という雰囲気がありました。いまは「学際的」と言いつつも、講座の枠にどうしてもとらわれているようです。これからは講座の枠を越えていく、ということを探求しています。例えば、講座名を冠さない授業を開設するというのはどうでしょうか。仮に「境界領域を探る」というような科目はどうでしょう。また「国際文化学概論」というような象徴的な科目があっても良いと思います。それに、いまは「16の講座がある」という雰囲気は強いですが、これからはもう少し「3つの専攻」を重視するようになれば、と考えています。

複数の教員によるオムニバス授業は是非ともやっていただきたいと思います。他の講座の先生を知る貴重な機会になると思うのです。

そうですね。検討してみましょう。

次は進路について伺います。前期課程の修了者はどのような進路を取るのでしょうか。

前期課程を終えた人は後期課程に進学する人が圧倒的に多いのが現状です。その他は、教員になる人の他、情報・通信、金融、建設、製造、小売などの業務に就く人がいます。また、国際機関に勤めている人もいます。



その為、研究科では外交講座というのを毎年開催しています。また、大使館勤務の人もいましたね。

前期課程修了後も国際的に活躍している方がいるのですね。それでは、後期課程修了者はどうでしょうか。特に就職面ではどのような支援をされているのでしょうか。

国際交流・学生支援室に、就職のための非常に充実した資料がそろっていますので、それを活用してもらっています。研究者になるための援助としては、例えば個々の学生が学会デビューするのを間接的に支えるということをしています。間接的ですが、研究職を目指している方にはそれが一番大きなことでしょう。

最近ではポストドクの問題が気になるのですが…。

そうですね。それは全国的な問題です。様々な制度を利用して後期課程修了者のために研究員などのポストを確保してあげたいのですが、なかなか難しい状況にあります。

昨年から国際文化学会との協力体制が出来たそうですが、これはどのような学会なのでしょう。

これは研究科発足の翌年に出来たもので、研究科の理念の中心にある「国際文化研究」をより具体的に目指すものです。立ち上げた時の文書では「国際文化研究の推進とその確立を目指す」と謳っていました。もっと具体的に言うと、今までの枠にとらわれない研究をしている学生に発表と論文執筆の機会を与えるのが目的です。原則的には先生方も学生も全員が参加することになっています。組織としては別ですが、研究科が後押しすることになっています。最近では参加者が減っているようですが、もう一度、最初のころの勢いを取り戻すことが出来ないかと考えています。

この学会を学生同士の交流の機会に出来ないでしょうか。

それは大事なことです。これに参加することによって、普段は交流のない他の学生がどんなことをやっているかということを知ったり、思いがけない交流を生み出すことができないかと強く思います。それで思い出すのが1997年の第4回学会です。そのときには学生によるシンポジウムと

いうものがありました。これは学生が自分から言いだして実現したもので、後期課程の一期生が企画したのです。テーマは「周縁からの文化発信」というものでした。学生4、5人がパネリストでしたが、あれは盛り上がりしました。旧来の枠組みでいえば、哲学、日本史学、英米文学などの異なる学部出身者なのですが、彼らが自分たちの視点から独自の発表をし、かなり白熱した議論になりました。あの雰囲気は忘れられないものです。あのようなのが自然発生的に出てくれば良いと思っています。また、日本国際文化学会という全国組織の学会があるのですが、これは2001年に出来たばかりの若い学会で、つい先日、第9回大会が行われたばかりです。ここでも「国際文化とは何か」ということを追求しています。こちらに参加されるのも良いでしょう。東北大学国際文化研究科の修了生が学会賞を取ったということも付け加えておきましょう。

つまり、国際文化研究自体が発展途上にあるということでしょうか。

そういうことです。研究のポイントは「あいだ」、「際」だと思います。それをどうとらえるかということです。「境界」と言ってもいいと思います。「国際文化学」は英語では International Cultural Studies ですが、international という言葉をどこにかけかが問題です。もちろん Studies にかかるのですが、その場合 cultural はどうなるのかという問題です。いま「国際」は単に nation と nation の間ではないと思います。やはり intercultural 「文化間的」であり、cross-cultural 「文化横断的」でなければいけないと考えています。

最後にお聞きします。この研究科で学ぶ意義は何なのでしょう。

違う「ものの見方」をどうやって身につけることが出来るか、それがこの研究科で得られる大事なことでと思っています。それはつまり、どれだけ創造的な思考が出来るかということです。一言で言うと、ややロマンチックな言い方になりますが「夢見る力」を身につけることだと思います。それは実現不可能なことを考えるということではなく、「思いがけないことを実現できる力」だと思います。

どうも長いあいだ有難うございました。

こちらこそ有難うございます。



## 言語脳認知総合科学研究センターの紹介



人がことばを話したり理解したりしようとするとき、脳の中で何が起きているのかは、長い間の謎でした。それがここ15年ほど、機能的核磁気共鳴画像法 (functional Magnetic Resonance Imaging: fMRI) などの非侵襲的な脳機能観

測技術を応用して、ことばを用いるとき脳のどの部分が働いているかを画像として見る事が可能になってきました。それにつれ、「言語」が関連する分野でも、言語学、心理学、医学、情報処理学など文系・理系の学問が深く関わって来るようになりました。文・理の壁を越えた言語科学の研究は国際的にも珍しいのですが、東北大学大学院国際文化研究科の言語科学研究者を中心として、情報科学研究科、医学系研究科、文学研究科の言語学、心理学、医学の研究者が連携し、工学者、遺伝学者をも将来含めて、我々は「脳の中のことば」に迫ります。

言語脳認知総合科学研究センターの前身は COE プログラムです。東北大

学 21 世紀 COE プログラム (人文科学) 「言語脳認知総合科学戦略研究教育拠点」は、平成 14 年度の開始以来、5 年間の研究教育活動を経て、平成 18 年度末をもって、その活動を終了しました。平成 19 年 4 月よりその成果を継承・発展させるため、国際文化研究科内に、その附属施設として「言語脳認知総合科学研究センター」を設置し、それ以来研究教育活動を継続しております。



センターの活動の一環として、(国際) シンポジウムを毎年二度程開き、また、外部の人々にセンターの活動を理解していただく為に、毎月コロキウムと公開講演会を開催しています。「コロキウム」は構成教員が自らの研究成果を発表する場で

あり、「公開講演会」は、国内外から各々の専門分野ですぐれた業績を上げている学者を招待し講演していただく場です。これらはすべて一般に解放されています。

(宮本 正夫)

## 博士課程修了者からのメッセージ



国際地域文化論専攻  
アメリカ研究講座  
平成22年3月  
博士後期課程修了

吉岡 宏祐

### 「ストリート・スマート」と「ブック・スマート」の接合

アメリカ合衆国の黒人英語に「ストリート・スマート」と「ブック・スマート」というスラングがあります。前者はストリートにおける経験から得られた知識を、後者は書物から得られた学識をそれぞれ意味する言葉です。いま振り返れば、これら二つの言葉の接合なしに博士論文の完成はなかったように思うのです。私はかつて学部時代米国留学中にマイアミの黒人ホームレスと生活を共にする機会がありました。そこで、目の当たりにしたのは、慢性的な失業、薬物の濫用、暴力が支配する異様な環境下でストリート・スマートネスを駆使して生活する人々でした。そこでの現実には圧倒された私は社会の歪みをより理解するための知恵を学問の世界に求めました。それが当研究科に進学した理由です。

進学後アメリカ研究講座の先生方の温かいご指導・ご鞭撻のもと一貫して取り組んできた研究テーマは、「自由」と「平等」という合衆国の建国の理念が「人種」という要因によって歪曲されてきた歴史を踏まえ、現代におけるマイノリティの救済策の在り方を再検討することでした。その具体的な考察対象として、1960年代以降、黒人問題を解決する一方案として合衆国が採用してきたアファーマティブ・アクションの現代的動向を分析してきました。同方案は日本語で「積極的差別是正措置」などと訳されることから分かるように、当初はマイノリティの差別を撤廃しなおかつ彼ら

の社会参画を実現する方策として導入されました。ところが、方策の施行からおよそ40年を経た現在では、その有効性や方策の非受益者に対する「逆差別」性等问题となり、幾つかの州で大幅な退潮を余儀なくされています。では、このような方策の退潮傾向は差別やそれに付随する格差が既に是正されたことを意味するのでしょうか。残念ながらそうではありません。確かに、同方案によって教育・雇用・契約の各分野における差別は改善され、多数の黒人中産階級や政治家が誕生したことは周知の事実です。しかしその一方で、依然として都市部のゲットーにおいて困窮状態や人種差別に喘いでいる人たちが大勢いるという事実も看過できません。

このような教育格差に由来する所得格差とその再循環は合衆国に限らず、我が国も含め、全世界的な問題です。この問題を解決するには、社会的弱者に対して教育の機会均等をいかに保障するかにかかっているといっても過言ではありません。つまりは、ストリート・スマートの延長線上にブック・スマートを接合することこそが求められていると考えるのです。

最後に、論文執筆の間、多くの励ましや貴重なご助言をくださった諸先生方ならびに院生の皆さまに感謝の意を申し上げるとともに、後輩の皆さまの今後のご研究の進捗を祈念して筆を置きたいと思います。



国際文化交流論専攻  
言語文化交流論講座  
平成22年3月  
博士後期課程修了

蔡 嘉綾

### 仙台・第二の故郷

桜、新緑、紅葉、白雪と四季折々の自然に彩られ、天国のように美しい杜の都・仙台、七年間も住んでいたところ、私にとってまさに第二の故郷です。東京の人間から見れば東北地方はまったく田舎だと思われるかもしれませんが、仙台は由緒ある伊達藩の根拠地であるため、仙台城跡、大崎八幡宮や瑞鳳殿など、自然に恵まれた歴史的な名所が多数あります。そのうえ、畑作業などの農業体験、夏は七夕まつり交流会、秋は紅葉狩りと芋煮会、冬はクリスマス交流会やスキー体験など、日本独自の歴史と風土に合わせたお祭りや伝統行事も四季を通してたくさん開催され、日本の文化に多大な興味を持っている外国人の私にとって、まさに楽しい発見の連続です。また、そんな素晴らしい自然の中で学問に励めることは本当に最高でした。

修士課程の時に研究ということの基礎を学び、さらに博士課程に進学するにつれ、授業やゼミに出席すること、幅広い視野から問題を捉えること、また、いろんな先行研究に基づき自分なりの独創的な発想を持つようになること、そしてその発想を論理

的に論文として書き、聴衆に分かりやすいように発表することなど、研究の真髄を身につけ、研究の醍醐味もこの国際文化研究科で味わっていただきました。

私の研究の内容は日中両言語における談話分析であるため、自然談話における音声データの収集は極めて重要なことです。実際にデータの収集をすることから音声データを文字化や分析するまで大変時間がかかりましたが、その成果が博士論文として価値あるものと認められ、大変嬉しかったです。もちろん大学院での研究生活や、博士論文を完成させることは決して楽なものではありませんが、苦勞が多ければ多いほど、それを乗り越えられたときの達成感も大きくて、将来どのような困難にあっても挫折しないという自信も持つようになりました。

博士号を取ったことは終着点ではなく、本格的な世界に入っていく出発点であると思います。そして国際文化研究科で身につけた真摯な研究姿勢を活かし、意欲を持ってこの道をさらに進んで行きたいと願ってやまないです。





国際文化交流論専攻  
異文化間教育論講座  
平成22年3月  
博士後期課程修了

カンキブン

## 多くを学び得られる研究生生活

博士論文を提出して、あっという間に半年が過ぎました。振り返ってみると、精一杯博士論文を書いていたのがまるで昨日の出来事のように思えます。内容を練り上げて、博士論文を形にするまではずいぶん時間がかかって、大変なこともありましたが、それを乗り越えたとき、とても大きな満足感が得られました。

博士論文の内容は第2言語習得の分野であり、テーマは「日本語アスペクト形式『ている』の習得過程の中間言語分析—中国語母語話者を対象に一」です。学習者の作文データに焦点を当て、横断研究と縦断研究を行いました。研究内容は、まず、「ている」の習得に影響を与える要因を調べて、次に学習者の中間言語が学習年数や習熟度などの上昇に従って、どのように変化するかを調査して、最後に中間言語に変化を起こす要因を探りました。

私にとって第2言語習得研究はとても魅力的な

分野です。収集した学習者のデータを分析したり、中間言語の形成要因を考えることで、自分の日本語の習得過程を振り返って、日本語学習を見つめなおす機会ができました。また、論文を書き上げることは単なる学位の取得だけではなく、物事を論理的に考えて記述できるような学びもあると感じています。博士論文がどんどん仕上がるにつれ、自分の人生観や物事に対する考えが少しずつ変わってきたと感じました。これは、論文を執筆する当初には思わぬ収穫です。

研究生生活は決して楽ではありませんでしたが、講座内の先生方々から丁寧なご指導をいただき、院生同士で議論したり、更に学会に出て優れた研究者の方々から刺激を受けて、多くを学び得ることができたので、楽しかったです。国際文化研究科の院生の皆様のご健闘を願っております。



国際文化言語論専攻  
言語応用論講座  
平成22年3月  
博士後期課程修了

柴田 尚子

## 博論を書くという経験

国際文化研究科に入学して7年目の今年3月に博士後期課程を修了しました。7年という月日は長いようではありますが、自分にとっては驚くような早さで過ぎていった気がしています。

博士論文は『シェイクスピア喜劇における制裁』というタイトルの下、何らかの理由で懲らしめられ、皆の笑い物になる登場人物に注目しながら、当時の民衆文化の影響や上演についての研究を進めていきました。途中、先の見えないゴールに不安を感じ、研究をする気力をなくしたり、行き詰ったりすることが多々ありました。そのような中、演習での先生方のアドバイスは研究を進展させるきっかけとなり、院生室での先輩や同期、後輩との語らいは気分を和らげ、私自身を大いに励ましてくれました。また、学会や研究会に参加することで、他大学の先生や院生の方々と知り合えるときっかけとなると同時に、多くの方々から様々な意見を頂くことで、より

いっそう研究が深められたと思います。

現在は、在学中から勤務していた学校で非常勤講師を続けながら、国際文化研究科の専門研究員として研究を続けています。博士論文を書き上げるという道のりは平坦ではなく、様々なことを経験すると思います。どんなに興味がある分野であっても挫折してしまいうことになることもあれば、精神的に落ち込んでしまうこともあるでしょう。そのような時は、先生方や研究室の仲間たちに遠慮なく相談することで解決の糸口を掴むことになります。どんな雑談でも研究を前進させるきっかけになると思います。

最後になりますが、私の研究に有益なご指導、ご助言をして頂いた指導教官の市川真理子先生をはじめ、言語応用論講座の先生方、及び、同講座の院生の皆さん、これまでの学生生活を支えてくれた両親と様々な面で支援して頂きました全ての方々に深く感謝したいと思います。

## 研究紹介

# 経済発展・環境・国際貿易の理論・政策分析

国際経済交流論講座

大東 一郎 准教授



私の専門分野は国際経済学で、とくに数学的に厳密な構造をもつ経済理論モデルの分析を基礎とした研究を行っています。近年取り組んでいる研究テーマは、大きくみて3つあります。

第1に、開発途上国経済を意識しつつ、「経済発展」はどのようなメカニズムで起きるのか、あるいはなぜ起きないのかを、経済理論を用いて厳密に考察する研究です。それはまた、どのような開発政策がどのような条件の下で「経済発展」を可能にするのかを考える研究でもあります。最新の研究では、貧困な途上国経済についてあてはまると思われる、人々の消費水準が高まると生産性が向上するという「生産的消費仮説」を基礎にした新たな経済成長モデルを構築することができました。このモデルにより、人口増加率が時間を通じて逆U字型（はじめは上昇しやがて低下する）の動きを示すか、そうでなければ単調に低下する動きを示すという途上国経済に広くみられる現象を、いまだ実物資本の蓄積が開始されない局面からそれが生じる局面への移行を通じて説明するという、従来の研究に見られない新たな分析を提示することができました。さらには、このような貧しい開発途上国経済に対して先進国から人間開発（健康・衛生・医療・教育等）に役立つ「援助」が行われた場合、途上国では1人当たり所得の増加を通じて実物資本の蓄積が開始され経済的に「離陸」できる場合があること、しかし条件によっては逆に人口増加率が高まってしまい、1人当たり所得の減少が生じて実物資本の蓄積が開始されなくなるという「貧困の罠」に陥る場合もあることが、明らかになりました。

第2は、開発途上国における「貧困削減と環境保護の両立可能性」に関する経済理論的研究です。地球規模で環境問題への関心が強まるにつれ、先進諸国と開発途上諸国が協力して環境保全に取り組む必要性が高まっています。

しかし、開発途上国の中には国内の貧困削減のために経済発展を優先し環境保護には必ずしも積極的でない国々もあります。そこで、貧困削減と環境保全とが矛盾しないためには開発途上国にどのような経済的条件が備えられているべきか、またどのような政策によってこれら2つの重要な目標が同時に達成できるのかを考えています。これまでの研究では、農村都市間人口移動を背景に都市に失業が存在する二重経済モデルにおいて、都市の工業汚染を減少させるための環境政策によって都市失業が減少する（少なくとも増大しない）ための経済的条件を導き出すことができませんでした。

第3は、巨大な寡占企業から成る国際的な不完全競争市場を想定した国際貿易理論・政策論の研究です。具体的には、ここ20年ほど世界的に活発化している自由貿易地域（FTA）の形成が世界経済全体での貿易自由化を促進するのか、それとも妨げてしまうのかを、国際寡占企業が輸出と直接投資を自由に選択できることを考えに入れたFTAのモデルに基づいて考えています。最新の研究では、FTAが形成された後に、経済成長によって域内市場が拡大した場合、そのFTAで設定される対域外関税率が引き下げられるのに対して、域内国企業の生産性が向上する場合には、対域外関税率は逆に引き上げられるという結果が得られています。この結果に注目することで、FTAの形成によって対域外関税が低下するか上昇するかは不明確であるという近年の実証研究での指摘に対して、新たな説明を与えることができるかもしれません。さらに、FTA域内国政府が貿易政策（対域外関税率）だけでなく直接投資政策をも同時に決定する状況では、上記のような対域外関税率の変化の方向が逆転することがあることも、明らかになってきています。

## 科学研究費補助金による研究（平成22年度）

| 氏 名          | 研究課題名                                    | 研究種目名       |
|--------------|------------------------------------------|-------------|
| 小 野 尚 之      | 生成語彙意味論に基づく語彙情報と事象構造の融合的研究               | 基盤研究（B）一般   |
| 志 柿 光 浩      | 米国地方行政・政治のプエルトリコ系住民への対応に関する地域間比較研究       | 基盤研究（B）海外学術 |
| 山 下 博 司      | ディアスポラにおける民族宗教の変質と再編ーヒンドゥー教と道教の動態的側面を中心に | 基盤研究（B）海外学術 |
| 鈴木 美津子       | ロマン主義時代の歴史小説構築への女性作家の寄与・貢献               | 基盤研究（C）一般   |
| 澤 江 史 子      | イスラーム復興を射程に入れた公共圏概念の研究：トルコの女性復興運動を事例として  | 基盤研究（C）一般   |
| 佐 藤 透        | 時と意味ー生の意味に関する現象学的分析試み                    | 基盤研究（C）一般   |
| 山 下 博 司      | タミル語バクティ詩人・スィットタルたちの思想と運動ーラーマリングルを中心にー   | 基盤研究（C）一般   |
| 佐 藤 研 一      | 18世紀日欧にみるベニョフスキー「世界周航」の衝撃                | 基盤研究（C）一般   |
| Narrog Heiko | 認知類型論による文法格の意味図構築に向けて                    | 基盤研究（C）一般   |
| 杉 浦 謙 介      | LMSの移動型端末としての携帯音楽プレーヤーー外国語教育のための拡張システムー  | 基盤研究（C）一般   |
| 大河原 知樹       | イスラム社会における「結婚力」の研究：フランス委任統治期シリアのケース・スタディ | 基盤研究（C）一般   |
| 野 村 啓 介      | フランス第二帝制の万博政策と地域権力に関する基礎研究               | 基盤研究（C）一般   |
| 落 合 明 子      | アメリカ合衆国の歴史系博物館における奴隷制の記憶の構築に関する研究        | 基盤研究（C）一般   |
| 市川 真理子       | 初期近代イギリス演劇言語の劇場空間論的観点からの分析研究             | 基盤研究（C）一般   |
| 澤 入 要 仁      | 19世紀の大衆詩における先住民インディアンー詩作の典拠資料から文化的影響までー  | 基盤研究（C）一般   |
| 鈴木 道 男       | ディアスポラにみる文学の再発見と蓄積ーアーカイヴ化されるマイノリティの記憶ー   | 基盤研究（C）一般   |
| 高 橋 大 厚      | 主語・目的語省略現象の比較統語論的研究                      | 基盤研究（C）一般   |
| 北 川 誠 一      | イルハン国の交通システム                             | 基盤研究（C）一般   |
| 劉 庭 秀        | 東アジア地域における資源循環モデルの再構築ー廃車由来のプラスチックを事例にー   | 基盤研究（C）一般   |
| 井 川 眞 砂      | マーク・トウェインと世紀転換期（1890ー1910）ー反帝国主義言説の修辭ー   | 基盤研究（C）一般   |
| 藤 田 恭 子      | 「在外ドイツ人研究」の制度化と禁忌化ーマイノリティ論から見たゲルマニスティックー | 基盤研究（C）一般   |
| 黒 田 卓        | イランにおける「近代性」との邂逅の現場                      | 基盤研究（C）一般   |
| 胡 云 芳        | 非市場部門のマクロ動学分析                            | 基盤研究（C）一般   |
| 柳 瀬 明 彦      | ストック外部性と国際貿易に関する理論的分析                    | 若手研究（B）     |
| 徳 田 幸 雄      | コンバージョン（キリスト教）・廻心（仏教）・タウバ（イスラーム）の比較研究    | 特別研究員奨励費    |
| 瀧 田 健 介      | 省略現象に関する比較統語論研究                          | 特別研究員奨励費    |
| 車 佳          | 環境政策の高度化に関する技術開発と国際比較研究ーE L V関連法制度を事例にー  | 特別研究員奨励費    |



## 研究紹介

# 自動車リサイクルと 国際資源循環

国際環境システム論講座

劉 庭秀 准教授



筆者は「アジア地域における国際資源循環と政策決定プロセス構築に関する研究」を行っている。特に、最近では「自動車リサイクル」をテーマに、アジア諸国の自動車静脈産業の政策決定プロセス及び再資源化の実態分析、資源回収効率の実験、中古部品及び再生資源のフロー分析など文理融合型の研究調査を実施している。しかし、本研究科の設備や研究費だけでは、このような海外現地調査、解体実験、シミュレーション分析の研究を行うことが非常に難しい状況であり、外部資金獲得や産学官連携による共同研究に依存せざるを得ない状況である。幸いに、昨年は本講座に「平成21年度補正予算案に係る実験・実習用設備：都市鉱山採掘・情報管理システム1式」の導入が認められ、2010年現在、筆者が研究代表者として実施している研究プロジェクトは、①科学研究補助金（基盤研究（C））「東アジア地域における資源循環モデルの再構築-廃車由来のプラスチックを事例に-」、②住友財団環境研究助成「アジアにおける自動車静脈産業の実態分析と国際環境協力ネットワーク構築に関する研究」、③宮城県3R新技術研究開発支援事業「使用済み自動車からのプラスチック分別回収による3Rスキームの開発に関する研究」などがある。

世界各国は生産者拡大責任の原則に基づいて様々なリサイクル法制度を整備している。日本は2005年から自動車リサイクル法を施行し、韓国も2008年からより強い生産者責任を求める資源循環法を導入した。一方、両国の制



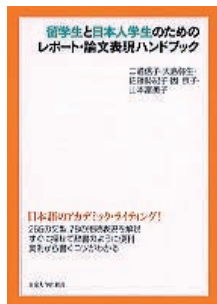
度はアジア諸国に様々な影響を与えている。例えば、中国は2011年に日本と韓国の制度を参考に独自の自動車リサイクル制度を構築しようとしているが、日中韓の間には環境配慮型設計及び廃棄物減量化技術、中古部品の再利用、再資源化技術などのレベルに大差がある。さらに、中国では、地域間の格差が大きく、地域特性を考慮したリサイクル制度の構築が必要である。



自動車製造業者に資源の有効利用や有害物質の適正処理の責任を求めるには、各国の現状を詳細に把握し、法律遵守のためのモニタリングシステムを構築した上、既存の制度の見直しと国内外におけるパートナーシップを構築していく必要がある。昨年、筆者が実行委員長を務めた「第2回アジア自動車環境フォーラム（Asian Automotive Environmental Forum）、2009年11月13日～14日、東北大学川内萩ホール」では、各国の利害関係者の間で、上記のような課題が活発に議論された。今後、アジア諸国は国際連携を通して、アジアにおける政策・技術情報交流、リサイクル技術協力ネットワークの構築、リサイクル情報の共有、人材交流を強めていくものと考えられる。

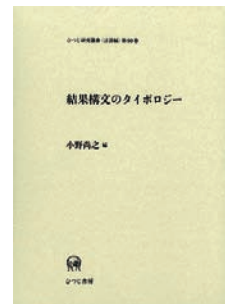
急速なモータリゼーションが進んでいるアジア地域では国内完結型の自動車リサイクルではなく、国際循環による資源の有効利用と法律遵守、国家間の情報共有・技術交流・人的交流によるパートナーシップ構築を視野に入れた制度設計及び運用が必要であり、これからは各国における資源循環政策及び静脈産業の動向を詳細に分析していく予定である。

## 最近の著作から

佐藤勢紀子  
教授

二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子  
『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』  
東京大学出版会、全218頁、平成21（2009）年12月24日刊、2500円（税別）

レポートや論文を書くためのガイドブックは数多く出版されているが、テーマ設定、文献収集、論理展開法などの解説に力点を置くものがほとんどであり、執筆段階で実際に用いる文型や表現を網羅的に示した表現集は、英語についてはともかく、日本語についてはこれまで作成されていない。本書は、日本語のレポートや論文について、構成部分ごとに、よく使われる文型や表現を豊富な実例をあげつつ提示するとともに、書き言葉独特の表現、引用の仕方、文献の示し方など、執筆上重要なポイントとなる項目を取り上げ、コラムの形で解説している。そうした意味で、本書は留学生のみならず日本人学生にとっても有用なアカデミック・ライティングの指南書となっている。本書の作成に当たっては、2006年度から開設されている国際文化研究科共通関連科目「研究のための日本語スキル」での指導経験、受講者からのフィードバックが大きな力になったことを書き添えておきたい。

小野 尚之  
教授

小野尚之編  
『結果構文のタイポロジー』（ひつじ研究叢書＜言語編＞第80巻）  
ひつじ書房、全487頁、平成21（2009）年11月10日刊、9400円（税別）

言語学において「タイポロジー」とは、世界の諸言語の普遍性と固有性の体系を明らかにすることを目指す研究である。本書はこのようなタイポロジーの観点から、結果構文をめぐる言語固有の問題とそれが照らし出す結果構文の普遍的特質を探究した論集である。本書には第一線で活躍する研究者たちによって書かれた10編の論文が収められている。結果構文はこの30年あまりの間英語を中心に研究が進められてきたが、本書はこの問題の世界諸言語への広がり示すと同時に、現時点での先進的な研究水準および今後の研究の方向性を示す道標になるであろう。

## INFORMATION

### 国際文化基礎講座(公開講座)

第16回国際文化基礎講座は、「暮らしのなかの宗教倫理——源氏物語・韓国映画・チェチェン戦争」という共通題目で開催された(平成21年10月31日、11月7日、14日)。今回の受講者数は71名(うちリピーター44名)にもものぼり、関心の高さがうかがわれた。まず、佐藤勢紀子先生の「光源氏の罪——カミ信仰、仏教、儒教の見地から」は、神道や仏教や儒教の視点に立って罪をみるという斬新な切り口から、光源氏を照射した。しかも、日本の罪の見方の原型を、万葉集を紐解くことから見定めるものであった。ついで、佐野正人先生の「韓国の暮らしに息づく儒教——ドラマ、映画を通して見る」では、「韓流ドラマ」の幾つかの場面をDVDで示しながら、韓国独特の「恨」の世界が、いかに日本とは似て非なる、すなわち儒教的生活様式に基づく家庭を舞台にして描かれるのか、解き明かした。最後は、北川誠一先生の「祈るイスラーム教と祀るイスラーム教」。ロシアと二度に亘って戦争を行ったチェチェンを例にとり、二種類の信仰を見極めるものであった。すなわち、神と自分との直接的関係に収束する個人的性格の信仰、および政治社会の組織的運営の原理となるべき信仰がそれである。最終日のラウンドテーブルでは、各講師を受講生が囲み、自由闊達な議論が交わされ、公開講座の幕を閉じた。(佐藤 研一)

### 東北大学国際文化学会大会

平成22年6月26日(土)、マルチメディア教育研究棟大ホールにて、第17回東北大学国際文化学会大会が開催されました。11名の発表者が、言語学や文学・文化、技術と倫理、観光、人間の安全保障など多様な領域について報告し、日本語や英語で熱の入った討論が繰り広げられました。今後も充実した活動を行っていきたく存じますので、学会活動に一層のご協力やご参加をお願い申し上げます。(澤江 史子)



### 東北大学国際文化学会第6回講演会

恒例となりました講演会が、平成22年5月12日に細見和之氏(大阪府立大学人間社会学部教授)をお迎えして行われました。当日は午前中まで雨が降る天気だったにもかかわらず、大学内外から多数の聴衆が集まり、その数は50名を超えました。細見先生はドイツ思想が専門ですが、今回は『イングラントの批評性——オーウェル、ディケンズ、ピンク・フロイド』と題し、英文学からロック音楽までを縦横無尽に語られました。映像資料を駆使しつつ進行するその講演は、時にユーモアを交えて会場に微笑を誘うかと思えば、他方で揺るぎのない思想を熱く語るという具合に、実に起伏に富んだものであり、立て板に水の如く語り続ける講演者の言葉に聴衆は酔い痴れたようです。(坂巻 康司)



### オープンキャンパス

平成22年7月28日と29日の両日、オープンキャンパスが開催されました。今年度は例年とことなり日程の都合で2日目だけが修士論文構想発表会の公開となりました。そのため参加者数が懸念されましたが、それでも68名が参加する盛況ぶりでした。国際文化研究科の教育研究を広く知ってもらうため、専攻分野ごとにブースを設け受験希望者の質問に答えたり、修士論文構想発表会を実際に参観してもらったりしました。事後のアンケートでもおおむね好評で、「研究科への理解が深まった」、「進路を考えるうえで有益であった」という回答がほとんどでした。(黒田 卓)



## 入学を希望される皆様へ

次の入学試験(春季入試)は、  
平成23年2月17日(木)、18日(金)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

詳しい入試情報については、本研究科ホームページ

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/?num=100521151426> をご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先 ● 東北大学国際文化研究科教務係  
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583  
● E-mail: [int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp](mailto:int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp)

## 編集後記

今年の『広報』は、概ね昨年の形式を踏襲しました。最大の変更点は、研究科長からのメッセージが学生によるインタビュー形式になったことだと思います。学生からの率直な問いかけがなされた貴重な試みになったと思いますが、いかがでしたでしょうか。『広報』は多くの皆様のご協力によって作られております。今後ともよろしくお願い申し上げます。(SK)